

ギンカクラゲ2



△
自然界でほとんど採集
されることがないギン
カクラゲのクラゲ

4本の放射
水管の黄緑色
の粒々は、藻
の固まりであ
る。植物が共

その数は莫大(ばくだい)
で、1群体から数千ものクラ
ゲが放たれた。しかし、自然
の海はあまりに広大で、この
程度では野外からは採れない
のである。

(京都大学准教授)

写真の1ミにも満たない小
さなクラゲを見て種類を判定
できる人はそうはいない。本
来、海辺で見つかることにな
い「ギンカクラゲのクラゲ」
なのだ。はるか沖合の黒潮が
とつとつと流れる外洋で、細

このれっきとしたギンカク
ラゲのクラゲは、少々変わっ
た姿だ。触手はまったくない。
口もあるのかないのか分から
ないぐらいに退化している。
きつと獲物を食べないだろ
う。

久保田 信

43



かい網目のネットをひくと、
ひよっとしたら採れることが
あるかもしれない。

ここで皆さんは「クラゲの
クラゲ」という言葉で首をか
しげるだろう。実は、まれに
海岸などに流れ着く青色の触
手を持った大きく立派なのは、
群体となつて浮かぶポリ
プなのだ。

生しているのだ。普通のクラ
ゲと違って、肉食ではなく、
藻から太陽の光を使つての光
合成でつくられた栄養をもら
っている。外洋で皆さんと
太陽を浴びて、このクラゲは
大きくなる。成熟した個体は、
この未成熟のクラゲよりもな
おさら発見しづらい。多くは
食物連鎖で食われてしまつた
らだ。

では、このクラゲはどうや
つて得たのだろう。短期間の
ポリプ群体の飼育によるもの
である。今年10月23、24の両
日に合わせて1285個体も
のポリプ群体が京都大学瀬戸
臨海実験所の北浜に流れ着い
た。これらの一部を水槽に収
容。流水飼育して、それから
遊離した本当のクラゲをプラ
ンクtonネットで集めたので
ある。